

街道を歩く

東海道駿河以東: 04 神沢一蒲原一富士川橋一本市場町

蒲原宿 由比宿から1里 名物富士見餅、あわび。
本陣1、脇本陣3、問屋1、旅籠42。町並み東西14町33間。
神原ともいわれた。馬の用達が厳しい宿で、1-2里も離れたところから調達していたという。
当初は、海岸沿い、東海道線の南側にあったが元禄12年(1699)8月15日の台風の大津波に遭い壊滅したので御殿あった現在地に移された。
岩淵から蒲原までは当初旧一号線の西側を通っていたが(下道)富士川の氾濫で通行不能になることもあったので更に西側の道ができた(上道)。

茄子屋騒動

宿出口に茄子屋という茶店があった。
承応2年(1653)高松藩の槍の名人久保甚太夫は興津川辺りで薩摩藩行列から辱めを受ける。ここ茄子屋の辻で待ち伏せし、何十人にも薩摩藩士を討ち恨みを晴らすのが力尽き討たれる。宿東の竜雲寺に葬られる。寺に槍が残されているという。

北条新三郎綱重の墓

永禄12年(1569)新三郎は近くの蒲原城にいた。武田軍に攻められ落城。ここ常楽寺のあったところに来て自刃。

若宮神社

甲斐で武田を掃討、帰途の信長を家康がここで接待した御殿跡。秀吉も小田原征伐の時立ち寄る。

浄瑠璃姫の墓・義経の硯水

三河矢矧長者の娘、浄瑠璃姫は奥州へ向かう牛若丸と一夜の契りを結ぶ。二人は悲しい別れをする。牛若丸はここ蒲原で病に倒れ息絶える。夢のお告げで知った浄瑠璃姫は蒲原まできて生き返らせ国に帰るが牛若丸が忘れられず後を追って蒲原まで来るが病に倒れ亡くなる。近くに牛若丸が姫に送った文に使った硯の清水の跡がある。

夜の雪の碑

安藤広重作の「蒲原夜の雪」この辺りは暖かくめったに雪が降らないことからあえて描いた。



東海道駿河以東: 静岡伝馬町・日本橋—④



角倉了以翁の功碑

慶長12年(1607)了以は幕府の命により岩淵河岸から甲州鰍沢河岸まで70KMにおよぶ富士川の開削工事を行い同19年(1614)完成させた。甲斐と駿河が船運で繋がった。下り甲州からは米。上がりは清水湊中継瀬戸内海の塩、お茶、魚が主に運ばれた。常夜灯は甲州通運と渡船の無事を祈って、文政3年(1820)に建てられる。

富士川の渡船

渡船場は東側松岡地区現橋の下流3カ所(河瀬により使い分け)西側は上流に設けられた。船は定渡船、高瀬船、助役船があり定渡船は人夫30人、牛馬4匹、船頭4人が置かれた最初、渡船業務は岩淵村が担当していたが交通量が多くなったので岩木村も加わった。

鶴芝の碑

本市場は間の宿。ここの茶屋が建てる。ここから富士を見ると中腹に鶴が舞っているように見えたので京都の画家蘆州が鶴を描き、江戸の学者亀田鵬斎が詩文を添えた碑

[弥次・喜多]

本陣の前まで来ると大名が到着、膳の用意でござった返している中へ喜多八入り膳を用意させたらふく食べる。さらに、汚い手ぬぐいに飯を包み弥次さんにも食わせる宿外れの木賃宿に泊まり、同宿した巡礼の母娘に夜這いをかけ、娘と間違えて婆さんのところへもぐりこみ、びつくりして、竹スノコ天井から落ちる。浴衣を売って弁償。
"じゅんれいのむすめとおもひしのびしは
さてこそ高野六十の婆々"

平成 20 年 12 月 20 日

あきやま